

愛隣館研修センターニュース

〒612-8141 京都市伏見区向島二ノ丸町 151 Tel:075-621-3849 Fax:075-621-1579
 E-mail:airinday@sunny.ocn.ne.jp http://www.airinkan.net 振替:01020-5-39321
 編集発行所:社会福祉法人イエス会 愛隣館研修センター 発行責任者:平田 義

96号

【報告】 戦後70年 2.11「平和について考える日」 ～米澤鐵志さんの被爆体験～

安保 剛

愛隣館では毎年、2月11日を「建国記念の日」という祝日ではなく、「2.11平和について考える日」として、集会を開催しています。

1873年、初代天皇即位日が「紀元節」として祭日に定められました。しかし、太平洋戦争敗戦後、新たな憲法制定にともないGHQによって廃止されます。その後1966年にふたたび祝日として復活、「建国をしのび、国を愛する心を養う」という趣旨のもと、国民の休日となりました。

愛隣館では、差別の元凶とも言える天皇制に疑問を持つ中で、初代天皇即位を祝うとされる2・11を祭日としてはとらず、「平和について考える日」と位置づけ、愛隣館内有志によるラブ&ピース委員会が主導となって様々なテーマについて学んできました。

昨年度の2・11平和集会には、沖縄伊江島在住の木村浩子さんにお越しいただき、憲法の大切さ、平和への願いをお話しいただきました。

2015年は戦後70年という大きな節目でした。そこで今年度は広島で原子爆弾による被害を受けた米澤鐵志さんをお招きし、被爆体験をお話しいただきました。

現在宇治市在住の米澤鐵志さんは1945年8月6日、広島に投下された原子爆弾の爆心地からおよそ750メートルの満員の路面電車内で被爆されました。

集団疎開中であつた当時11歳の米澤さんは、疎開先である広島北部の高田郡から

広島市内へ向かう路面電車と一緒に乗っていた母と共に被爆されます。一瞬にして焼け野原となった広島の街を、家族が待つ広島北部に位置する、疎開先の高田郡へと向かいます。その道中で米澤さん親子は凄絶な光景を目の当たりにされました。

被爆直後の広島の様子は、映像や情報などで知識はあるものの、実際に目にされた米澤さんが語るその光景は、70年前、現実にあつた広島での凄絶な出来事だったのだと、あらためて認識させられるものでした。



↑米澤 鐵志さん 2.11集会にて

太平洋戦争敗戦から70年、戦争を体験された方々のご高齢となり、直接お話を聞ける機会はこれからどんどん貴重なものとなっていきます。その上、広島で被爆された方々や、爆心地1キロ範囲内で被爆され、現在まで生存されておられる方はほとんどおられません。

『ぼくは満員電車で原爆を浴びた
—11歳の少年が生きぬいたヒロシマ』

米澤 鐵志 (著),
由井 りょう子 (著)



今回、米澤さんから直接、体験談を聞いたことは非常に貴重で、本当に無くてはならない機会だったと思いました。

同じ電車に乗っていた米澤さんのお母さんも被爆、その後亡くなられたとのことですが、鐵志さんは奇跡的に回復されました。また原爆の投下後、母乳を飲んでいた妹さんも亡くなられています。妹さんはおそらく内部被爆で亡くなったのではないかと、後年米澤さんは気づいたそうです。

核爆弾は、その爆弾の威力のみでなく、放射能による後遺症により命を落とすなど、生涯苦しめられることになるのです。

福島第一原子力発電所事故から5年、事態の終息を待たず、川内原発に続いて高浜原発3号機が再稼働となりました。電力自由化によって、これまで電気を扱っていなかった企業が電気の売り買いを出来るようになります。より安く質のいい電気の供給・サービスを提供するために、価格競争が企業間で起こり、私たち消費者は今までより安く電気を手に入れることが出来るようになるでしょう。光熱費が安くなるのは大賛成ですが、価格競争によってコスト削減を余儀なくされるであろう電力会社は、より効率の良い発電方法として、現在日本にある稼働していな

い原発を再び動かす大きな動機になることもあり得るのではないのでしょうか。

日本は原爆被爆国でありながら、核の平和利用として、原発を推進してきました。安全で効率の良い発電、としてきましたが、安全は100%ではありません。ほんのわずかでも事故の可能性があるなら、福島原発のように、そして広島・長崎への原爆投下のように、取り返しのつかない事態となる可能性があるということです。

70年前、敗戦国となり、その後独立国となった日本。しかし独立とは名ばかり、現在も日本各地に米軍基地が居座り、いわゆる「おもいやり予算」として在日米軍駐留経費が毎年防衛省予算に計上、沖縄の普天間米軍基地の一部を辺野古沖へ移設する費用を負担するなど、独立した国とは到底思えません。

日本は現在、平和で豊かな国へと成長を遂げましたが、いま日本が置かれている状況、向かおうとしている方向、犠牲となる誰かの上に築かれようとしている平和は、本当の意味での「平和」といえるのでしょうか。



柏木正行さんの 魂に触れる	物と心	大切な物は 物ではなく 心なのです	物は壊れます 買い換えられます	しかし心は 買えません	だから私は 金の山よりも 人間の 芥子種程の心 を大切に したいのです
------------------	-----	-------------------------	--------------------	----------------	----------------------------------------------------

2015年12月、2016年1月、2月行事報告

- 12/15 デイケア・シサムクリスマス会
- 12/23 『愛隣』クリスマス会
- 12/28 デイサービス忘年会
- 1/20 2.11 事前合同学習会
- 1/25 愛隣館医療的ケア学習会 (口腔ケア)
- 2/11 2.11 平和集会
- 2/29-3/9 アジア国際夏期学校 (SIEA) タイセミナー

手持ちの力を“使う”とは？

相談支援スキルアップ研修報告（主催：京都市 実施：「あいりん」）

私が所属する「あいりん」は障がいのある方の相談だけでなく、毎年相談支援に関する研修を実施する役割も求められている。詳細は触れないが、近頃、相談支援をとりまく状況は転換期を迎えている。本来エネルギーを注ぐべきところが置き去りにされ、数と体裁に比重が移っている気がしてならない。それは障がいのある子どもも例外ではなく、変化が及ぼす影響のスピードに追いついていない危機感さえある。だからこそ、そもそも大切にすべきことをもう一度考えるため、今年度の研修は奈良女子大名誉教授で発達心理学がご専門の浜田寿美男氏に講演をお願いした（1月26日京都テルサ）。

浜田氏のお話は派手なエピソードにまつわる武勇伝ではなく、手の届かない理想論や根性論で圧倒されるわけでもない。難解な専門用語抜きに、ただ私たちが当たり前だと思いこんでいることや目の前を通り過ぎている事実について、捉え直しによる気づきのきっかけをそっと添えてくださるようだった。

私たちは発達という基準で、人の能力や状態を判断する。しかし、ばらつきがあって当然の能力や状態を、平均値や時代背景から導き出された基準で判断するだけで、果たして目の前の人と向き合ったことになるのか。その人の本質に迫ることができるのか。この問題提起が浜田氏のお話のポイントであったように思う。

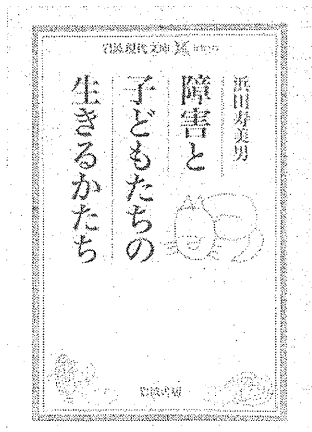
「人はどうやって生きているのか?」。講演の中盤、浜田氏は参加者に問いかけられ、話の重要なポイントだと察知した会場の空気が引き締まる。「当たり前のことですよ」と何度も念を押されつつ「人はこの今を、この身体で生きている」と示された。さらに「この身体に備わっている力で生きている」と続く。身体に備わった力、つまり「手持ちの力」は使って初めて身体に根ざす、これが発達の大原則と指摘された。

確かに、私たちはこの身体なしに生きることとはできず、この身体に備わっていない力を発揮することはできない。例えば、私は今この文章を書くという力を使っている（備わっていないので英語で書くことはできない）。書く力を使っているから私の身体に根ざし、備わっているから違う場面でも書くこ

とができる。書く以外にもあらゆる力を使って、将来でも過去でもない今この時を生きている。

発達という基準を持ち込み、能力の「ある・なし」もしくは行為が「できる・できない」という視点で、障がいのある方と関わろうとしてしまう。使うという発想はなかった。だから、今後は手持ちの力に着目した関係性を育み、どうすればその力を使うことができるか、どうすればその力を使って新たな世界を味わうことができるのかも考えていきたい。同時に、将来のためという先回りに縛られず、今使うという感覚も大事にしたい。また、浜田氏は「人はプレゼントができる生き物」ともおっしゃっていた。その言葉をお借りするなら、手持ちの力は自分だけでなく、他者のために使うことも大切といえる。他者に喜んでもらい、自分の役割を実感できるように力を使うことも、併せて忘れないようにしたい。

私は本を読む際、大事だと思う文章には目印として付箋を貼っている。裏を返せば、その付箋の数が多いほど、私にとっては大切な本となり、本棚の「殿堂入りコーナー」に保管される。つい最近、そこに新たな本が仲間入りした。『障害と子どもたちの生きるかたち』（岩波現代文庫）。著者はもちろん浜田氏。何となく考えていたり、気にも留めなかつたりすることに言葉を吹き込んで、丁寧に整理してくださる文章が特徴的。だから今回の研修のように、様々な場面に応用できる。決して子どもの発達という視点だけではない。慌ただしい生活を顧みることのきっかけとして、是非手にとっていただきたい一冊。



『障害と子どもたちの生きるかたち』
（岩波現代文庫）文庫

浜田 寿美男（著）

3.11メモリアルキャンドルin向島2016

慰霊と復興への願いを込めて、向島で思いを馳せる機会をもちます。
ぜひお立ち寄りください。

▼3月4日(金)~11日(金)10:30~16:00 福島の子もたち保養写真展

飛田晋秀氏「福島のすがた~3・11で時間の止まった町~」
チーム絆「宮城県気仙沼の支援報告」などの展示も行います。

▼3月5日(土)14:30~16:30 お話会「福島原発事故5年目 私たちの思い」

早尾貴紀さん「原発事故から5年、そしてこれから」
齋藤夕香さん「サポート紡 活動報告」

▼3月11日(金)18:00~19:00 キャンドル点灯

311個の灯籠を、3.11にかたどって点灯(雨天は3月12日に順延)

*場所:マイタウン向島(向島ニュータウンセンター商店会内)

キャンドルは、向島ニュータウンセンター広場(京都銀行向島支店前)

ご支援ありがとうございました

今年度も多くの皆様に支えられて活動を続けていくことができました。

今後ともよろしくお願い致します。

感謝を込めてお名前を載せさせていただきます。

愛隣館研修センターを

支えて下さった方々

《月定会員》市川潤子,伊吹恒二・寛子,浦由佳里,岡田友香,奥間早登子,奥野美奈子,大谷優子,柿本真介,神戸萌子,金山秋義,河原崎美恵子,君村千代子,木村美由紀,木村耕,北園由希子,菊地義則,坂田明子,沢井怜可,櫻恵子,佐々木智子,酒井由喜,塩谷幸代,菅野晴治朗・千景,田中晁・千栄,崔恩京,刀根史恵,中島雅子,中村かおり,中村直子,西村美枝子,菱田万里子,福田尚子,前川有紀,松野正信・清美,壬生輝子,村川知子,毛利元美,森弘・雄子,安野喜仁・優美,山崎希充子,藪内みのり

《指定献金(夏期特別、クリスマス、年会費)》

郵便振替(個人):四方哲②,小国里恵,匿名②,織田雪江,叶信治,篠木幸二郎,近藤孝子,中村

信博,中西静子,梅田健也,梅村貞造,山内恵美,寺本喜宥,秋山幸美,田中工務店田中勝久,黛正,間淵史子,藤田早紀,匿名,杉原輝明,黒田絢,銅銀正美,中村和雄,山口政紀,藪中利光(翔太),本田桃子,木村拓貴,今井美令,上野翔太郎,住友新史,西田一貴,富増献児,川西大祐,賀川一枝,村瀬義史,前島宗甫,辻中徹也,鈴木祥子,高柳富夫,川田よしみ

その他寄附金(個人):大飯原発高階,榎本てる子②,君村千代子,中井二美⑤,高木春美②,安野喜仁,優美②,松岡聡子,松本幸子・圭子④,溝口智之・久美子②,岸野新吾・修三②,平井啓之,高橋秀幸,柿本真介,杉山モト子,畠田知佳,藤田早紀,菊地義則,匿名,秋山眞一郎
郵便振替(団体):丹波新生教会,甲子園二葉幼稚園,同志社女子高等学校,愛之園保育園,友愛幼児園,みどり野保育園,

光の子保育園 PTA,西宮一麦教会,所沢教会,市川三本松教会,夙川東教会,神戸教会,京都丸太町教会,枚方くずは教会,啓明学院,同志社中学校宗教部,原宿教会,ケアハウス楠葉新生園,軽井沢追分教会,京都御幸町教会,一麦保育園,同志社中学校・高等学校,翠ヶ丘協会
その他寄附金(団体):新婦人の会,新婦人の会(コスモス班),NAの会,Pink cherubic,空の鳥会,二ノ丸民生児童委員協議会,二ノ丸学区社協,民商ニュータウン支部,伊藤珠算教室,世光保育園、向島伝道所

(1,900,072円 165口)

2016年2月26日現在敬称略

尚、記入に際しましては万全を期しておりますが万が一記載漏れがありましたらご一報ください。

☆お知らせ☆

▽愛隣館研修センターは、3/30-31を休館日とさせていただきます。

★編集後記★

▼温かいメッセージに感謝です!(さ)

▼今年度も多くの方々の
お支えありがとうございました
ました▽戦後70年を迎
えた昨年、「戦争法案」
が強行採決され、戦争で
きる国へとまた一歩進ま
せてしまった▽安部政権
は、次に、憲法の「改悪」
を目論んでいる▽辺野古
では、多くの沖縄の反対
の声を無視し続け、埋め
立て工事の準備を強引に
進めてきている▽福島第
一原発の後始末が一切行
われていない中で、次々
と原発が再稼働される▽
この国は一体どこに向
うとしているのか▽先
日、被爆体験を持つ、米
澤鐵志さんのお話を聴い
た▽想像を絶する悲惨な
体験をされた方々のお話
しに耳を傾け、「一度と「殺
し」「殺される」ことを許
さない思いを強く持たな
ければならない▽「平和」
をつくりましょう(ひ)